

< 論 文 >

近代朝鮮におけるナショナリズムと
「シンボル」の機能に関する一考察
— 独立協会の活動と独立門をめぐる (1896-1899) —

金 容 賛*

A Study of Functionality of the “Symbol” on Nationalism in Modern Korea:
Activities of the Independence Club and the Independence Arch (1896-1899)

KIM, Yong Chan

The purpose of this study is to rethink on functionality of the ‘Symbol’ strongly linked with the ‘National common purpose’ which was created in the nation-building process of modern Korea. This study focuses on the Independence club’s activities and their ‘symbols’, and to find out the true sense of ‘Independence of Korea’ engraved on the Independence Arch, which was defined by The Independence Club.

The word ‘Independence’, which was engraved on the Independence Arch, is not to mean a ‘Particular Country’, but it is to mean a ‘Purpose’ for achieve by oneself. It seems that ‘Symbol’ doesn’t only value a particular period of history, but has ideologically functionality to legitimate political activities. Therefore, it is important to consider that how the ‘Symbol’ has changed its meaning and has been emphasized by individuals or organizations to legitimate political activities.

Keywords : Modern Korea, Nationalism, Symbol, Independence Arch, Independence Club

キーワード : 近代朝鮮、ナショナリズム、シンボル、独立門、独立協会

* 立命館大学大学院 国際関係研究科 研究生

はじめに

近代朝鮮におけるネイション形成過程は、制度的統合の失敗から心情的統合へ集中された「政治的統合の不安定な情勢」という背景のもとで展開したと考えられる¹⁾。それは、つまり脅威となる「他者」に対して「我々」が抵抗をする場合、「上から」のナショナリズムの制度的動員による人々の結束は不可能であり、むしろ人々の要求や不満、そして怒りなどの心情的要因による「下から」のナショナリズム的動きが人々の結束を左右したからである²⁾。だが、「下から」のナショナリズムの特徴として、人々の結束、つまり「我々」の凝集性は「他者」の存在だけで生成するものではなく、「他者」に対して「我々」の共通となる「目的」がどのように確立されていったのかを問う必要がある。政治的近代化を通じてネイションが形成される過程は、「我々」なる範疇に内在する「内的相違」を何らかの方法で克服することを意味するがゆえに、「内的相違」を克服するに不可欠なものとして「共通の目的」の確立に注目することが必要となる。

本稿は、権力または政治団体の活動において「シンボル」がなぜ必要であったのかという問題意識から近代朝鮮のネイション形成過程において、「共通の目的」の確立をめぐる「シンボル」の機能がどのように現れたのかについて考察するものである。近代朝鮮、とりわけ大韓帝国期（1897-1910年）における「シンボル」の形成に関する既存の研究には、主に君権強化事業の背景に焦点をあてたものが多くみられる³⁾。李潤相^{イ・ユンサン}によると、大韓帝国期において、国王の位相を高めるとともに国家の位相も高めようとした君権強化事業には、東アジアの・伝統的方法（皇帝即位、明成皇后国葬、独立門建設、宮殿建築などの事業）と、西欧的・近代的方法（国旗、国歌、国家記念日、勲章、国家象徴物などの制定事業）が用いられたと述べている⁴⁾。すなわち、忠君愛国の性格を持った君権強化事業とは、大韓帝国の皇帝を「シンボル」として形成しようとした「上から」のナショナリズムと言えよう。また李潤相は、当時の君権強化事業によって、近代国家としての「外形」が整備されていったとしつつも、「自主独立」を維持するための「中身」が欠如していたと指摘し、大韓帝国では自主独立国家としての「中身」をどのように整えようとしたのか、その過程を考察する必要があるという課題を提示している⁵⁾。この李潤相の指摘から、「自主独立」を維持する「中身」とはどのようなものであったのかという疑問が生じてくる。それゆえ、大韓帝国において、自主独立国家としての「中身」が構築されていく過程を考察する必要がある。

本稿では、上記の課題を踏まえた上で、「下から」のナショナリズムの観点から独立協会の活動（1896-1899年）に注目し、ネイション形成と「シンボル」の関連性について考えたい⁶⁾。月脚達彦によると、独立協会運動では、近代朝鮮のネイション形成に関する有益な観点を提供する要素があると、「象徴操作」の視点から検証している⁷⁾。月脚達彦のナショナリズム研究は、知識人階層による啓蒙運動に焦点をあてているが、独立協会が活動していく過程のなかでみら

れる政府や国王との関係、つまり支配関係の視点からも注目する必要があると考える⁸⁾。すなわち、知識人階級が既存の国家権力を打倒するにあたり、その展望を示す論理として、近代的なナショナリズムを大衆的に組織していく過程が存在する。この場合に考えられる知識人階層には、権力に結びついた層とそうでない層に分かれるがゆえに、ここで重要なのは、対象となるナショナリズムが、権力的に大衆を組織するものか、それとも大衆の素朴な不満や怒りを大衆運動に関連付けて組織していくものかという峻別が必要になると考える。それゆえ、その過程のなかで「シンボル」がどのような役割を果たしたのかを考察することが本稿の狙いなのである⁹⁾。

第1章 独立協会による「シンボル」の創造

日露戦争から日韓併合（1904年-1910年）までの近代朝鮮では、ネイション形成をめぐる「共通の目的」が「国権恢復」から「独立」へと移っていく時期であった。日韓併合以後のネイション形成をめぐる、「独立」という「共通の目的」がどのように担保され、維持されていったのかという問題を挙げることができる¹⁰⁾。しかし、それに先立って、もう一つの「独立」、つまり日韓併合より15年を遡った日清戦争以後の「独立」について、ネイション形成とどのような関連性があったのか、予め明確にしておく必要があると考える。

第1節 ナショナリズムにおける「シンボル」の機能

「シンボル」とは、展開していくナショナリズムにおいてどのような機能を果たすものであろうか。チャールズ・E・メリアム（Charles E. Merriam）は、権力を「人間の生活に深く織り込まれている慣習や文化の産物」という観点から政治的象徴の機能について分析をし、鉄砲、軍艦、石の城壁、鉄条網と言った物理的要因よりも、人間に対する共通の衝動形式と言った心情的要因に注目する¹¹⁾。すなわち、いかなる権力も、物理的な強制力に依存すると、敵対意識や不満などをもたらすがゆえに権力基盤を揺るがすような傾向があり、その一方で政治的象徴は、人々の感情を揺り動かすことによって「権力関係の心理に含まれる崇拜という要素を強調する」¹²⁾ 傾向があると述べているのである。メリアムの政治的象徴に関する研究は、政治権力の維持に焦点をあてており、「人間と人間との政治的関係を『意味を喚起するもの』としての象徴（言語を含む）を媒介としたコミュニケーションの過程」¹³⁾ として捉えている。また、高瀬淳一は、メリアムの政治的象徴の具体的な機能について、「権力の暴力的側面を隠蔽すること、政治権力や権力を担う個人の印象を人びとに刻み込ませること、権力集団に対する賛美を形成すること、個人に対する満足感を付与すること」の四つの効果があるとまとめている¹⁴⁾。

そして、アントニー・D・スミス（Anthony D. Smith）によると、「シンボル」はもちろん、「神話」、「記憶」、「価値」などの要素を援用することによって、ネイションやナショナリズム

を分析する重要な手掛かりとなると述べている¹⁵⁾。これらの要素は、さまざまな組み合わせによって、運動の持続性を生成し、社会構造や文化を形成して、さらにコミュニティの内部における異なる領域の集団や組織の関係を正当化すると、スミスは言うのである¹⁶⁾。すなわち、「シンボル」とは、コミュニティの内部において一つのコミュニケーションの手段となり、人々の感情を揺り動かして集団意識に正当性を付与することによって、集合体に凝集性と持続性を生成させる、イデオロギー的機能を有するものであるとすることができる。さらに、「シンボル」を創造する側からすれば、彼らの「目的」を達成する上で、彼らの「目的」を他の集団までも包括できる「共通の目的」として提示し、正当化するために「シンボル」を利用すると考えられるのである。それゆえ、「シンボル」を用いた政治的行動を分析するためにも、「シンボル」に込められている意味を明確にしておく必要がある。ここでは、こうした観点から、近代朝鮮における「シンボル」の形成について考えていきたい。

第2節 徐載弼の帰国と「自主独立」の拡散

日清戦争の終戦とともに結ばれた日清講和条約（1895年4月17日）では、「大清國確認大朝鮮國係獨立自主之邦」¹⁷⁾と明記され、朝鮮が完全なる独立自主の国であることを明確にする契機となった。それに伴って1895年6月2日、国王高宗は、朝鮮全国の「臣民」に対して独立の喜びを分かち合えるよう、独立慶祝日を定めることを命じたのである¹⁸⁾。明治政府の支援によって誕生した朝鮮の親日政権は、甲申政変（1884年）によって亡命していた人々を集め、本格的な社会改革に取り組むこととなる¹⁹⁾。甲申政変以後、亡命先のアメリカ国籍を取得していた徐載弼（Philip Jaisohn）は、朝鮮政府の要請に応じて11年ぶり（1895年12月25日）に帰国して中枢院（朝鮮政府の諮問機関）の顧問を担うこととなる²⁰⁾。独立新聞の創刊号では、「我が新聞は、貧富貴賤を差別せず、この新聞を読んで外国の物情と内地の事情を知ってほしいという志を抱いているがゆえに、男女老若・上下貴賤間に我が新聞を隔日、数ヶ月間読めば、新しい知覚と新しい学問が生まれると予知する」²¹⁾とあるように、徐載弼の帰国目的には、身分、貧富、性別、年齢を問わないすべての「朝鮮の人々の啓蒙」にあったことがわかる。

徐載弼が帰国して間もなく、朝鮮では、乙未義兵運動が蜂起し、国王がロシア公使館に逃れる俄館播遷が発生する。かくて、親日政権は崩壊したのである。その間、徐載弼は、内部大臣の兪吉濬と、新しい親露政権の学部協辦（学務・教育を担当）となる尹致昊を通じて民間新聞の発刊を準備していた。徐載弼が新聞の発刊を決意した背景には、日本の外務省の支援を受ける漢城新報の影響も存在したと考えられる²²⁾。日清戦争の終結が近づいた1895年2月27日から発行されていた漢城新報は、親日的な情報発信とともに諺文（ハングル）を用いることで、「朝鮮の人々の啓蒙」を目的としていた²³⁾。だが、漢城新報の言論活動を注視していた親露政権の外部大臣である李完用は、日本公使に対し、漢城新報の無礼な行動と報道の信憑性について抗議するとともに、今後慎重な報道をするよう要求したのである²⁴⁾。そうした状況のもとで、

1896年4月7日に徐載弼が主幹となった独立新聞が創刊されると、漢城新報の報道内容に対する批判を展開し、両新聞社は競争関係に入ることになる²⁵⁾。日本公使の小村寿太郎が外務大臣の陸奥宗光に送った書信によると、漢城新報は独立新聞との競争から混乱に陥っており、また王妃殺害事件や俄館播遷などさまざまな面から身動きの取れない状況に至っていたのである。つまり、この時点で、漢城新報は、このままでは廃刊に追い込まれる危険性があったことがわかる²⁶⁾。このように、朝鮮における親日的世論を高めようとした漢城新報を批判する独立新聞は、明治政府から、警戒すべき存在として把握されていたのである。

写真 1-1. 迎恩門



写真 1-2. 迎恩門柱と独立館と独立門



出典：慎鋪廈『新版 独立協会研究（上）』一潮閣、2006年、310-316ページより引用。

徐載弼は、発刊する新聞を独立新聞（英語版名は *The Independent*）と命名したが、彼は「独立」をどのように捉え、どのような表現で人々に伝えようとしたのであろう。それは、徐載弼と政府官僚が中心となって結成した独立協会の最初の目的であった独立門および独立公園（写真 1-2 を参照）の建設からも理解されよう²⁷⁾。この建設の目的について、「朝鮮が何年も清国の属国であったが、神様の恩恵で独立され、朝鮮大君主陛下が今は世界の首脳と同等な立場となり、朝鮮人民が世界にまたがる自由な人になったがゆえに、このようなめでたいことを無視するのは道理ではない。朝鮮が独立したことを世界に知らせ、また朝鮮の後生に、この時から朝鮮が永遠に独立したことを伝えるためにも表迹（表象）が必要であり、また朝鮮人民が養生するには新鮮な空気を吸い、景色が良く静かな場所で運動をすべきである。慕華館に新しく独立門を建て、その周辺を公園にして千秋万歳自主独立した公園であると伝える志である」²⁸⁾と、独立新聞は報じている。また、独立門が意味する「独立」については、中国だけではなく、日本、ロシア、ヨーロッパ諸国の影響圏から独立することであると記してある²⁹⁾。徐載弼は、独立門の定礎式での演説を通じて、独立門を支えることとなる複数の石に例えて「国も大小人民が各自職務を尽くすことによって国が永久に独立となる」³⁰⁾と、「独立」を実現する方法として政

府と民間の協力が重要であると強調したのである。

これらの記事をまとめると、独立門に刻み込まれた「独立」とは、単に特定の国からの「独立」を記念するものではなく、周辺国から自立して国王が他国の首脳と対等な立場となったがゆえに、これを契機にして、自力で「独立」を達成していくという「自主独立」を意味するものとなったと考えられるのである³¹⁾。したがって、独立門が記念する「独立」とは、「対象」よりも「目的」を表すものであったとすることができよう。その「自主独立」を達成するためにも、徐載弼は、人々を一国の国民として啓蒙しようとする彼の帰国目的を独立門の建設に付与したと考えられる。それに関連して、愼鏞廈^{シン・ヨンハ}は、独立協会が独立門と独立公園の建設を通じて「国民的統合」と「愛国心」を高揚させる象徴操作（symbol manipulation）に情熱を注いだと評価している³²⁾。これは「シンボル」を創造する目的を把握するためにも重要な指摘ではあるが、特定の時期に限定された評価は、「シンボル」の一面を見ることにとどまると考える。独立門と独立館は、建築物の「シンボル」であるがゆえに、「シンボル」をめぐる歴史全般において「シンボル」の持つ意味が、それを管理する個人または組織によってどのように維持され、またどのように変化していったのかという変遷過程を考察することこそ、「シンボル」の全体像を知ることにつながると考えるのである。次に、独立門の全体像を知るために、一先ず「自主独立」をスローガンに掲げた徐載弼と独立協会が、どのような活動を展開していくのかについて考察したい。

第2章 独立協会の活動における目的と課題

徐載弼と独立協会は、「自主独立」を達成するための一環として、朝鮮の人々に近代的思考を持たせる啓蒙運動を展開することになる。かかる活動では、どのような前近代的要因を克服する必要があるのか、また国王や政府との支配関係において、どのような課題に直面したのかについて考えたい。

第1節 独立門の二つの碑文

徐載弼は、「我が新聞が漢文は書かずに国文だけで書くのは、上下貴賤の誰もが読めるようにするためである。（中略）各国では人々が男女関係なく自国の国文を先に学んでから外国語を学ぶが、朝鮮では朝鮮の国文を学ばなくても漢文だけ学ぶがゆえに、国文を良く知っている人が稀である」³³⁾と、独立新聞の創刊号において、ハングルを使用する目的と、ハングルが使われている現状について述べている。要するに、コミュニケーションの便宜を図るために、身分・性別・貧富の差などの「内的相違」を克服するために、そして自国の言葉に対する「誇り」を持たせるために、新聞の使用文字をハングル一つに統一したのである。その趣旨を、建設することとなる独立門に刻んでおく上で、独立門に掲げる碑文を「on-mun」（諺文）、すなわち

ハンゲルで刻むことを望んでいたことがわかる³⁴⁾。そして、ハンゲルの使用にこだわるもう一つの理由が存在したと考えられる。それは、中国の従属国であったことを象徴した迎恩門（写真 1-1 を参照）の跡地に、新しく独立門を建てることで変わりゆく朝鮮の将来像を描いている、The Independent の記事から読み取ることができる³⁵⁾。その将来像とは、旧秩序を変えようとする、つまり朝鮮国内において中華崇拜主義を打破しようとする挑発的な意味が込められていたのである。

写真 2-1. 南側の「독립문」



写真 2-2. 北側の「獨立門」



出典：キム・ジョンドン「沈宜錫が立てた独立門と独立館を中心に」
 (『韓国建築史学会秋季学術発表大会論文集』、2010年)、121 ページより引用。

だが、実際独立門が完成すると、南側の正面にはハンゲルの碑文が、北側の裏面には漢字の碑文が掲げられることとなった（写真 2-1、2 を参照）。それは、ハンゲルの使用に対する徐載弼や独立新聞の趣旨とは別に、当時の朝鮮社会は中華崇拜主義、儒教の文化などの前近代的な情勢のもとにあったがゆえに、支配階層となる国王や王室、そして守旧勢力を刺激しないための、判断ではなかったのではないかと考える。そのような姿勢は、独立新聞の創刊号において、「我々は、まず偏らないがゆえに、どこの政党とも関係がなく、上下貴賤を区別せずにすべての人が同じ朝鮮の人であると捉え、朝鮮のために人民に伝える」³⁶⁾と掲載してあることから読み取ることができる。すなわち、独立門に二つの碑文が掲げられたことは、独立協会と支配階層との関係を正常化することによって支配階層からの協力を促し、朝鮮の近代化を推進する独立協会の活動を正当化するための狙いもあったと考えられるのである。それゆえ、独立門と独立公園、そして独立館の建設に関わるすべての費用は、王太子（後の純宗皇帝）と政府官僚および独立協会の会員の寄付、そして独立新聞と皇国新聞の連日広告による大衆の募金から賄われたのである³⁷⁾。そして、1897年5月23日、独立館には王太子の直筆による看板が掲げられた³⁸⁾。独立協会の活動に対して王室が協力的であったのは、韓興壽が指摘するように、この当時の独立協会が非政治的運動を展開していたがゆえに³⁹⁾、特に忠君愛国を前提とした啓蒙

運動を展開していたからであろう。かくて、独立協会の結成目的であった「シンボル」建設事業は、「すべての人」に「共通の目的」を持たせようとするものであり、朝鮮における「内的相違」の克服に向けた挑戦であったのである。

第2節 討論会から大衆集会への拡張

穏健な啓蒙運動と「シンボル」建設事業を通じて、支配階層からの協力を得ることができた独立協会であったが、「独立」の達成を「共通の目的」としたナショナリズムが高まっていくなかで、政府と独立協会の支配関係は、近代化をめぐるどのように変化していったのであろうか。

独立新聞の発刊と「シンボル」建設事業とともに、徐載弼は本格的に啓蒙運動を展開していく。徐載弼を支援する宣教師のヘンリー・ジェラード・アペンゼラー (Henry Gerhard Appenzeller) は、彼が校長を勤める培材学堂の講師として徐載弼を招いた。徐載弼は、彼の海外経験を活かして歴史、地理、社会、文化など、一般知識と世界情勢について授業を行っていたが、後に討論会を開いていくことになる⁴⁰⁾。徐載弼は、朝鮮の人々が大衆の前で行なう演説の仕方や集会を運営する方法が未熟であることから、討論を通じてその訓練をする必要があると考えていた⁴¹⁾。討論会のメンバーは、協成会という組織を結成してより活発な活動することになるが、そこで徐載弼が出会った人物の一人が後に大韓民国の初代大統領となる李承晩^{イ・スンマン}であった。独立協会は、協成会メンバーとともに改修が終わった独立館 (旧慕華館) を会場にして一般参加による討論会を毎週日曜日に開催した⁴²⁾。徐載弼は、独立協会が開催する討論会について、それまで馴染みのなかった「世論」をつくることにその目的があったと述べ、討論会に参加した大衆は、「団結の精神」(the spirit of cohesion)、「ナショナリズム」(nationalism)、「寛容な見解」(liberality of views)、「教育の重要性」(the importance of education) に鼓吹されていったと記している⁴³⁾。

俄館播遷以降、朝鮮をめぐる影響力が日本からロシアへ変わる構図となると考えられるが、ロシア公使であったカール・イヴァノヴィチ・ヴェーベル (Карл Иванович Вебер) は、日本人が朝鮮において絶対的な影響力を行使していたと語っている⁴⁴⁾。その基盤として、①二万人を超える日本人移住者、②日朝間の活発な貿易、③京釜線鉄道敷設、④京釜間の電信線、⑤ソウルおよび開港地における日本銀行の開設、⑥日本銀行券の流通、⑦日本乗客船の就航を挙げている。これらの項目からもわかるように、当時朝鮮における居留民や関連施設を保護するために1,000人に及ぶ日本の兵隊がソウルに駐屯しており、また国王を守る親衛隊が親露新政権を支持しないがゆえに、国王高宗は還宮を判断することに躊躇せざるを得なかったのである⁴⁵⁾。しかし、ついに1897年2月20日に慶運宮への還宮が実現した。国王の宮殿である景福宮ではなく、ロシア公使館に隣接した慶運宮 (現徳壽宮) を選んだことを見ると、一年間のロシア公使館での滞在を通じて、ロシアに対する国王の信頼が一層深まったことが伺える。同年の9月、新しくロシア公使に

任命されたアレクセイ・ニコラビッチ・シュペイエル（Алексей Николаевич Шпейер）は、釜山の絶影島の石炭庫基地を租借することを要求するとともに、親衛隊をロシア式編制にするためにロシア人の軍事教官と、財務省である度支部に財政顧問を派遣したのである。このように国王と親露政権は、ロシアの力を借りて専制君主国家の基盤をつくろうとしていたのである。国王の還宮以後、国王を皇帝に昇格させる称帝建元の上疏が相次ぎ、1897年10月13日に国号を「光武」とした大韓帝国が成立した。

「自主独立」を掲げている独立協会にとって、大韓帝国の内政に関与するロシアは牽制すべき対象であったがゆえに、親露政権と独立協会の間では、「独立」を実現しようとするその手段と方法の乖離が際立っていくことになる。ロシア公使のシュペイエルをはじめ、各国の公使からの影響を受けた親露政権は、1897年12月14日、徐載弼を中枢院顧問から解任することに成功する⁴⁶⁾。これは、政府における徐載弼の影響力を排除するため、独立協会の勢力を弱めるための措置であった。独立協会の討論会は、こうした情勢を受けて、不正に満ちた政府官僚への批判や、ロシアの接近に対抗する「自主独立」の守護について、1898年2月から2ヶ月間にわたって討論を行なった⁴⁷⁾。同年の2月22日、討論会の開催と同時に、独立協会では、ロシアの内政関与の問題について上疏することが満場一致で可決され、会長の安駟壽^{アン・ギョンス}を代表にして高宗皇帝に上疏を提出した⁴⁸⁾。この上疏では、はじめに、国たる条件として、「自立して他国に依存しないこと」、「政事と法律を整備して全国に行使すること」が必要であり、それを推進するのは皇帝の権限であることが強調されている。また、独立協会を結成して独立門を建てたことによって、上にしては皇帝の地位を尊い、下にしては人々の志を固めて永遠なる基礎を確立したという、独立協会の活動の正当性を訴えた。これらを踏まえて、今回の上疏の目的であるロシアの内政関与の問題について、人々の意思が反映されていないことを申し出たのである。上疏提出以後、政府から何の改善策も提示されないことから、独立協会は別の行動に移ることとなる。翌月の3月10日、独立協会が主催となって、ロシアの内政干渉を許した政府の政策決定の撤回を要求する万民共同会を開催したのである⁴⁹⁾。倍材学堂を卒業して教員になっていた李承晩は、万民共同会の総代委員として選出され演説を行なうなど、これを契機にして本格的な政治的活動に取り組むこととなる。かかる万民共同会の秩序の保たれた厳粛な運営は周囲の参加者を驚かせるとともに、この集会の成功は、結果として、ロシアの軍事教官と財政顧問を送還させることになる⁵⁰⁾。

このように、万民共同会の開催によって政府の方針が転換されたことは、政府が単独で意思決定を下すことができず、大衆の意思を受容せざるを得ない状況に置かれていたことを意味している。万民共同会を成功に導いた要因は、大衆にとって、ロシアの内政関与を認める政府の対外依存政策が「自主独立」に反すると捉えられたことにあると考える。つまり、独立協会に対する大衆の支持は、独立協会が掲げる「自主独立」に正当性があるという意識が大衆化してきたことを意味するものである。それは、啓蒙運動と世論形成に携わっていた徐載弼が、独立

門建設を契機に「自主独立」の正当性について新聞媒体を通じて訴え、また討論会を通じて喚起したからこそ可能なことであったと考えられる。

第3章 民権と君権の均衡をめぐる二つの「独立」

万民共同会は成功したものの、中枢院の顧問を解任された徐載弼は、大韓帝国から追放される立場となった。徐載弼がソウルを去る日（1898年5月14日）、徐載弼は彼を見送るために集まった人々に対して、「諸君は、大韓独立の基礎を固め、皇帝に忠誠し、二千万同胞兄弟を愛して、大韓自主の権利を整え、国を支えて富国とし、勇猛の心で、国のために死ぬ覚悟で、今後世界万国から同等な扱いを受けるように、二度と外国人に侮られないように」⁵¹⁾と告げた。独立新聞と討論会、そして万民共同会の成功を実現したことによって、徐載弼は、彼の帰国目的であった啓蒙運動と世論が形成される基盤ができあがったと考え、後のことを朝鮮の人々に託してアメリカへ発ったのである⁵²⁾。

第1節 「自主独立」を目指す議会設立運動

このように、徐載弼不在のまま活動を余儀なくなれた独立協会と独立新聞において、徐載弼に代わって、指導的な役割を担ったのが尹致昊であった。尹致昊は、万民共同会以後「自主独立」を築いていく目標として、中枢院を議会に昇格させて参政権獲得を目指す議会設立運動を展開し、また独立協会の結束を固めるために「議院を設立することが政治上一番の要務」というテーマで討論会を開催した⁵³⁾。独立協会を支持した大衆の背景には、政府に対する不満も一つの要因であった。万民共同会の成功に伴って、政府に不満を持つ、独立協会を利用しようとする、さまざまな勢力が独立協会に加わることとなり、尹致昊は構成員に大きな変動があった組織の統合を計るためにも議会設立を目標として定めたと考えられる⁵⁴⁾。要するに、独立協会の運動形態は、それまでの啓蒙活動を中心とした運動から、さらに政治的な運動に展開したがゆえに、主たる運動が文化的ナショナリズムから政治的ナショナリズムへと転換していったと言えるのである⁵⁵⁾。

議会設立運動を実現するためには、政府からの協力は必要不可欠なものであったがゆえに、独立協会は、皇帝に対して不正を行なった官僚を解任し、その代わりに独立協会の会員を有力官僚に起用することを求める運動を展開した⁵⁶⁾。やがて、政権のポストに独立協会の会員を起用することに成功したことを契機に、尹致昊は、中枢院の管制を改革して参政権を付与すること、さらに議席の50席に対して政府と独立協会にそれぞれ50%の議席を配分することを政府に要求した⁵⁷⁾。議席数をめぐる協議が行なわれていた際、守旧派は独立協会が大統領推戴を企んでいるというプロパガンダを行なう。その結果、起用されたばかりの独立協会系列の官僚は解任され、さらに独立協会の幹部17人が逮捕されるという事件に発展した⁵⁸⁾。アベンゼラー

の家に逃げ込んで逮捕を免れた尹致昊は、李承晩を通じて再び万民共同会を開いて会員の釈放を求めようとした⁵⁹⁾。尹致昊のこのような判断は、活動不能となった組織を復活させるためには、独立協会を支持する大衆を組織することしかないと考えたことによるものであったと言える。独立協会の幹部多数が逮捕されている状況のもとで、白木塵都家（現パゴダ公園の西側に所在した木綿商店組合）にて万民共同会が開催され、尹始炳ユン・シビョンが会長に選出された。高宗皇帝は、連日開かれた抗議集会を解散させることができず、逮捕した全員を釈放することになったのである⁶⁰⁾。だが、会員釈放の目的を達成しても解散しない万民共同会は、再び議会設立運動を展開していった。それに屈服した高宗皇帝は、各国の公使と領事、そして大衆の前で独立協会の要求を受諾することとなったのである⁶¹⁾。

第2節 朴泳孝復帰陰謀と独立協会の解散

甲申政変と日清戦争以後の親日政権において、クーデターを計画した罪に問われて二度も日本に亡命した朴泳孝パク・ヨンヒョは、亡命中の人々を集めて政界復帰を模索していた⁶²⁾。アメリカにいた徐載弼を直接訪ねて帰国するように要請した朴泳孝は、独立協会が政治団体として成長するにつれ政界復帰を実現する絶好の場と捉えていたのである。ロシア牽制を目的とした万民共同会の成功とともに、尹致昊路線と安駟壽路線の乖離が明確となっていくことによって、朴泳孝は安駟壽路線に接近していく⁶³⁾。だが、安駟壽は、1898年7月に謀反の計画が発覚されてしまい、日本に亡命したのである⁶⁴⁾。同年の11月10日に独立協会の幹部17人が釈放されたことで再び好機と判断した朴泳孝は、彼の側近である李圭完イ・ギョワンを帰国させ、独立協会会員の組織化に取り組んだのである⁶⁵⁾。

万民共同会の成功から政治的活動にいつそうの確信を持った李承晩は、それ以降、徐載弼の在留と独立協会の幹部17人の釈放を求める万民共同会の中心人物として浮上することとなる。1898年11月29日、独立協会の議会設立の要求が受諾されたことを受けて、中樞院の議員50人が選出された。そこには、万民共同会の会長を務めた尹始炳と李承晩が含まれていたが、独立協会および万民共同会の関係者は過半数に及ばない17人とどまっていた⁶⁶⁾。同年の12月16日、中樞院では、朝鮮政府である義政府の役人を選出する案を出した独立協会の崔廷徳チヨニ・ジョンドクによって投票が行なわれた⁶⁷⁾。その結果選ばれた11人は、最終決定権を持つ高宗皇帝によって承認されるはずであったが、ここで問題が発生する。大逆罪人とされて日本に亡命している朴泳孝と、アメリカ国籍の徐載弼が含まれていたのである。そのことが独立協会の存亡を左右することになった⁶⁸⁾。朴泳孝の選出をめぐる、議長イ・ジョンゴンの李鍾建をはじめ守旧派の議員は投票を拒否し、また独立協会の内部でも論争になったにもかかわらず、朴泳孝の選出賛成派⁶⁹⁾は議長イ・ジョンゴンの代理として尹始炳を推戴し、問題となった選出結果をそのまま断行したのである⁷⁰⁾。これに対して高宗皇帝は、まず役人選出の案を出した崔廷徳と議長代理の尹始炳を解任し、罪人を選んだ議員を捜索して逮捕し、軍隊と行商人を動員して万民共同会の鎮圧に乗り出したのである。

そして、高宗皇帝はついに独立協会に解散命令を下すことになる。尹致昊、尹始炳、李承晩、崔廷徳など、多数の幹部は外国人の家に逃亡して、議会設立運動は失敗に終わった⁷¹⁾。これに伴い、独立協会は1899年1月に解散され、独立新聞は同年の12月に廃刊されることになる。

李泰鎮の評価を議会設立運動に照らしてみると、議会設立運動を支持して万民共同会に参加していた大衆は、日本に「騙された」結果として映ってしまう。しかしながら、上記の分析によれば、以下の点を指摘することができる。独立協会が専制君主制に挑戦した議会設立運動は、結果として朴泳孝復帰陰謀が加わったものの、その過程からしては、単に独立協会と政府間の対立にとどまらず、朝鮮の支配階層である守旧派の存立に関わる問題、また高宗皇帝にとっては君権の縮小に関わる問題を表面化させたのである。独立協会と支配階層の間に「独立」という「目的」は共通したものの、「専制君主制の維持」と「立憲君主制の導入」という、「目的」を達成していくための方法において、一致することのできない「内的相違」が存在していたのである。支配階層を刺激しない穏健な啓蒙運動からはじまった独立協会であったが、徐載弼の不在と主要メンバーの交代によって、独立協会が政治団体として一変したことは明らかである。尹致昊に託された独立協会は、「自主独立」を達成するために権力の獲得を目指して議会設立運動を展開したが、それが皇帝権力に挑戦する活動であったとは言え、日本の侵略主義の影響によるものではなく、内在的な課題によるものであり、朝鮮における政治的近代化の一部分であったと考えられる。ロシアの牽制から議会設立運動に至るまで、万民共同会における大衆参加が持続可能であったことは、独立門建設が契機となって「自主独立」をスローガンに掲げた独立協会の一貫した方針にあったと考える。

まとめに代えて

ここまで、近代朝鮮のネーション形成過程において、「共通の目的」の確立をめぐる「シンボル」の機能がどのように現れたのかについて、徐載弼と独立協会の活動を中心に考察してきた。

まず、独立門が記念する「独立」とは何であったのかについて、単に特定の国からの「独立」を記念するものではなく、自力で「独立」を達成していくという「自主独立」を意味するものであったことを、独立門の建設をめぐる独立新聞の記事や演説を通じて明らかにした。「自主独立」を達成するために、徐載弼と独立協会が展開した活動とその目的をまとめてみると、以下の四つの過程を踏んで近代化を推進していったとすることができる。第一に、朝鮮の人々に対する啓蒙運動の一環として、自国の言葉に対する「誇り」を持たせるとともに中国崇拜主義を打破するために、ハングルを使用した独立新聞を創刊したこと。第二に、「自主独立」の趣旨を刻み込んだ「シンボル」建設事業は、独立協会と支配階層との関係を正常化することによって支配階層からの協力を促がし、朝鮮における「内的相違」の克服に向けた挑戦であったこと。

第三に、「自主独立」の守護を議題とした討論会と、大衆集会である万民共同会を開催することによって、政府の対外依存政策に反対してロシアの内政関与を牽制したこと。第四に、諮問機関であった中樞院を議会に昇格させて参政権獲得を目指す議会設立運動を展開したことである。

このように、「シンボル」建設事業から議会設立運動まで、独立協会の活動の原動力となったのは、大衆の支持と参加であったと言える。すなわち、自主独立国家としての「中身」が構築されることは、近代的思考を持つ人々が大衆化されることであると考えられるのである。それゆえ、権力や政治団体は、政治的活動に対する正当性および大衆の支持を獲得するために、「シンボル」を用いてその正当性を訴え続ける必要がある。要するに、「シンボル」は、権力や政治団体の正当性を大衆に対して訴えるコミュニケーションの手段として、運動の凝集性と持続性を生成する機能を有するものと言うことができるのである。

だが、議会設立運動の失敗と独立協会の解散によって、「自主独立」の「シンボル」であった独立門が、その後どのような性格を持つようになったのかについては、改めて論稿を起こす必要がある。それゆえ、「シンボル」として独立門の全体像を知るためにも、日韓併合以後の「独立」との関連性を考えるためにも、独立協会の解散によって逮捕や亡命を免れた独立協会の残存勢力に注目し、政治的活動の再起を目指して「自主独立」を復活させるのか、または運動の失敗を契機として新たなスローガンを掲げて大衆に訴えるのか、独立門をめぐってどのような政治的活動が再び展開していくのかについて解明する必要があると考える。

注

- 1) 拙稿「近代朝鮮におけるネーション形成の政治的条件に関する一考察」(『立命館国際研究』第24巻2号、2011年)、204-205ページ。
- 2) ここで筆者は、ナショナリズムを運動現象として捉え、また支配関係に基づいて「上からはじまったもの」と「下からはじまったもの」を区別する。これらのナショナリズム的運動が展開される最初の段階において、その主体が支配する側なのか、支配される側なのかを峻別することによって、かかる運動の性格を把握することが重要であると考えからである。丸山眞男は、「民族運動の指導権を誰が握るかによってその化合の仕方なり強度なりは種々異なる」と指摘した。すなわち、ネーション形成が「上から」のナショナリズムによるものなのか、あるいは「下から」のナショナリズムによるものなのか、つまりネーションは誰によって形成されていくのかを問うことにより、形成されるネーションの特性が明らかになると言うことができよう。丸山眞男『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1971年、280ページ。
- 3) 李潤相「大韓帝国期における国家と国王の位相提高事業」(『震檀学報』Vol.95、81-112ページ、2003年)。陸秀炫「大韓帝国期における国家視覚象徴の淵源と変遷」(『美術史論壇』第27号、289-321ページ、2008年)。同、「大韓帝国期における国家象徴制定と慶運宮」(『ソウル学研究』第40号、159-185ページ、2010年)。都冕會「政治史的側面からみた大韓帝国の歴史的 성격」(『歴史と現実』19、14-39ページ、1996年)。
- 4) 李潤相、前掲書、109-110ページ。
- 5) 同上、110ページ。
- 6) 姜在彦(カン・ジェオン)は、1890年代後半における開化運動の特徴について、「従来の革新的少数

- 派による『上から』のブルジョア改革運動という制約をこえて、『独立新聞』および独立協会による啓蒙運動をつうじて開化思想が大衆のなかにしだいに浸透し、開化運動がそのような大衆的基盤を土台にして、万民共同会による『下から』の大衆運動に転換したことである」と述べている。筆者は、独立協会の主体がジャーナリストや官僚などと言った知識人階層であったことを軽視するわけではなく、独立協会が、現存する権力に対して非権力の側にあったこと、つまり現存する体制を打倒して新しい体制を構築しようとした運動の観点から、独立協会の活動を「下から」のナショナリズムと捉えていることを明確にしておきたい。姜在彦『新訂 朝鮮近代史研究』日本評論者、1982年、238ページ。
- 7) 月脚達彦『朝鮮開化思想とナショナリズム』東京大学出版会、2009年、1-15、173 - 212 ページ。
 - 8) 同上、7-15 ページ。
 - 9) すなわち、ナショナリズムを「上から」の側面しか存在しないという月脚達彦の主張に対し、本稿はその「上から」の側面をさらに支配関係に細分化した捉え方であると言える。知識人階層による「上から」のナショナリズムといえども、支配関係からみれば、どの勢力が権力を獲得するかによってネイションの「中身」も変化し得ると考えるからである。
 - 10) 拙稿、213-214 ページを参照。
 - 11) 高瀬淳一「政治言語の分析と政治的象徴理論」(『社会科学討究』第43巻3号、1998年)、190-194 ページ。C.E. メリアム『政治権力上』(齊藤真、有賀弘 訳) 東京大学出版会、1975年、7-9 ページ。
 - 12) C.E. メリアム、前掲書、155 ページ。高瀬淳一、前掲書、191-192 ページ。
 - 13) 高瀬淳一、前掲書、191 ページ。メリアムの政治的象徴に関する研究は、Charles E. Merriam, *Political Power: Its Composition and Incidence*, McGraw-Hill, 1934 [和訳『政治権力 上、下』(齊藤真、有賀弘 訳) 東京大学出版会、1975年] と、Charles E. Merriam, *Systematic Politics*, Univ. of Chicago Press, 1945 [和訳『体系的政治学』(木村剛輔 訳) 鎌倉文庫、1949年] を参照。
 - 14) C.E. メリアム、前掲書、147-164 ページ。高瀬淳一、前掲書、192 ページ。
 - 15) Anthony D. Smith, *Ethno-symbolism and Nationalism; A cultural approach*, Routledge, New York, 2009, pp.23-40.
 - 16) *Ibid.*, p.25.
 - 17) 「日清講和條約締結通報」『駐韓日本公使館記録』、1895年4月21日。
 - 18) 「独立慶祝日に定めることを命じる」『朝鮮王朝実録』高宗33巻1895年5月10日、1番目の記事。
 - 19) 「申哲均など九名にすべて官爵を回復させる」『朝鮮王朝実録』高宗33巻、1895年3月1日、1番目の記事。
 - 20) ここで筆者は、外部協辦の起用に応じなかった徐載弼が(1895年6月2日、旧暦の5月10日)、なぜ12月末に帰国したのかについて注目する。甲申政変に加担した朴泳孝(パク・ヨンヒョ)の要請が帰国する契機となったが、徐載弼は甲申政変に加担した大逆罪人の一人として、打倒する対象であった守旧勢力の王妃閔氏(後の明成皇后)が殺害されたこと(1895年10月8日)も帰国を決心した契機となったのではないかと考える。いずれにしても、徐載弼にとって帰国することは命に関わる大変慎重な選択であったことが伺える。「申箕善などに官職を除授した」『朝鮮王朝実録』高宗33巻、1895年閏5月10日、6番目の記事。徐載弼記念会 編『先駆者徐載弼』耆婆朗、2011年、31-32 ページ。金承台『独立協会を創設した開化・改革の先駆者徐載弼』歴史空間、2011年、68-70 ページ。「徐載弼の変装入国」『駐韓日本公使館記録』、1895年12月25日。
 - 21) 「論説」『独立新聞』、1896年4月7日。
 - 22) 漢城新報は、当時の井上馨駐韓公使の支持を得た安達謙蔵が、朝鮮の度支部協辦(財務省の高官)である安駒壽(アン・ギョンス、後の独立協会の初代会長)から土地建物のような現物資産の提供を受けて発刊した。佐々博雄「熊本国権党と朝鮮における新聞事業」(『国士館大学文学部人文学会紀要』第9号、1984年)、29-34 ページ。安達謙蔵『安達謙蔵自叙伝』新樹社、1960年、47-49 ページ。
 - 23) 佐々博雄、前掲書、29-31 ページ。安達謙蔵、前掲書、47-49 ページ。
 - 24) 「漢城新報記事の無礼抗議と慎重な報道要求」『駐韓日本公使館記録』、1896年2月21日。
 - 25) 「雑報」『独立新聞』、1896年4月23日。「雑報」『独立新聞』、1899年3月21日。佐々博雄、前掲書、33 ページ。
 - 26) 「新政府ハ理非ノ別ナク已レニ利ナカサルモノハ芟除シテ憚ラサルノ當時ニアツテハ況シテ唯一ノ新聞

ニシテ日本人機關ノ目アル該新報ニ於テハ無論彼ノ凝視ヲ免レ様モ無之新政府ハ間モナク反抗ノ一手段トシテ獨立新聞ナルモノヲ發刊セシメ之ニ能フ限リノ便利ヲ與ヘ以テ該新報ト競争セシムルコトニ立至ル（中略）新政府ノ内訓ト獨立新聞ノ競争ノ結果經濟上更ニ一困難ヲ加ヘ日ニ孤城落日ノ有様ヲ呈シ目下有志者ノ非常ノ盡力ナルニ抱ラス永遠繼續ノ見込不相立ハ誠ニ苦慮スヘキ事ニ有之候 左レハ其成行キニ任セ棄置候テハ到底廢刊ノ不幸ヲ見ルヨリ外無之候ニ付今日ニ於テ其維持ノ方法ヲ講セサレハ能ハサル場合ニ立迫リ候。『漢城新報ノ補助金増額ニ關スル件』『駐韓日本公使館記録』、1896年5月30日。

- 27) 李泰鎮（イ・テジン）は、獨立門の建設が徐載弼および獨立協會によるものではなく、当時の政府の事業であったと『獨立新聞』の1896年7月2日の「論説」を引用して主張している。だが、筆者は、この「論説」における獨立門建設の記述について、政府の事業として宣伝しているよりも、国王と政府の協力によるもので、近代化を推進する国王と政府の正当性を訴えたものとして捉える。李泰鎮の主張のように、獨立門建設が政府の事業であったとすれば、亡命していた大逆罪人の徐載弼の帰国をどのように説明できるのか疑問を持つ。「獨立協會規則」『大朝鮮獨立協會會報』第1号、1896年11月30日。李泰鎮「1896-1904年ソウル都市改造事業の主体と指向性」（『韓国史論』Vol.37、1997年）、202-203ページ。「論説」『獨立新聞』、1896年7月2日。
- 28) 「論説」『獨立新聞』、1896年7月4日。
- 29) "This arch means independence not from China alone but from Japan from Russia and from all European powers". *The Independent*, June 20th, 1896, 'EDITORIAL'.
- 30) 「論説・獨立館演会」『獨立新聞』、1896年11月24日。
- 31) 韓興壽「獨立協會會報の内容分析」（『社会科学論集』Vol.6、1973年）、34-35ページ。
- 32) 慎鏞廈『新版 獨立協會研究（下）』一潮閣、2006年、744-745ページを参照。
- 33) 「論説」『獨立新聞』、1896年4月7日。
- 34) "Today we rejoice in the fact that the King has decided to erect upon the ruins of the arch outside the West Gate, a new one to be entitled Independence Arch. 독립문. We do not know as its inscription will be written in on-mun but we wish it might". *The Independent*, June 20th, 1896, 'EDITORIAL'.
- 35) "For centuries the arch stood there as a constant insult to the autonomy of Korea, an autonomy which China always hastened to assert when called upon to stand responsible for any tremble in the peninsula but which she always denied when it was safe to do so. She denied it once too many times and now her "suzerainty" is where the old arch is, namely op-so. And now an arch is to be raised on the same spot to stand forever as a negation of Manchu dominance to show that Korea is once and for all cut off from the blighting influence of Chinese patronage; cut off, we hope, also from the system of fraud, corruption and trickery which today makes that most populous empire the laughing-stock of the world". *Ibid.*
- 36) 「論説」『獨立新聞』、1896年4月7日。
- 37) 詳しくは、慎鏞廈『新版 獨立協會研究（上）』一潮閣、2006年、308-312、316-318ページを参照。
- 38) 「雜報」『獨立新聞』、1897年5月25日。「雜報」『獨立新聞』、1897年5月27日。
- 39) 韓興壽「獨立協會の政治集団化課程」（『社会科学論集』Vol.3、1970年）、26-27ページ。
- 40) 徐載弼は、慶應義塾と陸軍戸山学校で一年間（1883年）、フィラデルフィアの Harry Hillman Academy とコロンビアン大学（現ジョージ・ワシントン大学）の付設であった Corcoran school of Science and the Art にて医学を学んで医師免許を取得した（1886-1893年）。より詳しくは、徐載弼記念会編『先駆者徐載弼』、金承台『獨立協會を創設した開化・改革の先駆者徐載弼』を参照。
- 41) *The Independent*, August 31st, 1897, 'Local Items'.
- 42) 詳しくは、慎鏞廈、前掲書、322-338ページを参照。
- 43) *The Korean repository*, Vol.5 No.8, 1898, p.286, 'The Independence Club'. 慎鏞廈、前掲書、323-324ページ。
- 44) またヴェーベルは、王妃殺害事件後の日本の対朝鮮戦略について、日本は、朝鮮の内政が混乱に陥るとすれば、より賄賂や買収、相互非難が増え、結局朝鮮政府から日本の保護を要請すると想定し、ロ

- シアの極端な抗議や戦争の発生原因を避けつつ、密かに、また組織的に朝鮮政府と国民の資産を乗っ取る方法を取っていたと把握していた。魯柱碩『帝政ロシアの外交文書で読む大韓帝国秘史』韓国学術情報、2009年、142-147ページ。
- 45) 「朝鮮国王の還宮と新政府の構成時の有件事項および政敵に対する寛容などをロシア公使に声明」『駐韓日本公使館記録』、1896年2月25日。
- 46) 金承台、前掲書、90-96ページを参照。
- 47) その討論の内容については、慎鋪廈、前掲書、327-328ページを参照。
- 48) 「安駟壽などが国家成立の二つの条件について上疏を奉った」『朝鮮王朝実録』高宗37巻、1898年2月22日、8番目の記事。『高宗時代史』4集、1898年2月22日。「施政一斑・任免一束・雜件」『駐韓日本公使館記録』、1898年2月28日。
- 49) "They said that the people of Korea consider that the controlling of the Military and Finance Dep't by foreigners is detrimental to the independence of this country. They expressed their thanks for the kind feeling Russia entertains for Korea's welfare, but as to allowing her to control these two most important departments in the government, the masses were strongly opposed". *The Independent*, March 12th, 1898, 'Local Items'.
- 50) "Considering the immense number of people assembled the meeting was as orderly one and the addressed were moderate in tone, and any inflammatory demonstration was immediately suppressed by the leaders. There were many foreign spectators among whom the Russian representative and his staff were interested onlookers". *Ibid.* 「排露熱動興并ニ露國士官顧問官等撤退一件」『駐韓日本公使館記録』、1898年3月31日。
- 51) 「雜報」『独立新聞』、1898年5月19日。
- 52) イ・ファンジク『独立協会、討論共和国を夢見る』プロネシス、2010年、126-132ページ。
- 53) 「雜報」『独立新聞』、1898年3月29日。
- 54) さらに、穏健な尹致昊や南宮楹（ナム・グンオク）に対して、安駟壽や鄭喬（ジョン・キョ）を中心に集まった急進的な若き会員の不満が生じ、そして独立協会を利用して政界復帰の計る朴泳孝の陰謀などが絡んでいたがゆえに、独立協会の統合は容易ではなかった。イ・ファンジク『独立協会、討論共和国を夢見る』、132-136ページ。朱鎮五「1898年独立協会運動の主導勢力と支持基盤」（『歴史と現実』第15巻、1995年）、178-200ページ。「雜報」『独立新聞』、1898年3月15日。
- 55) 文化的ナショナリズムが政治情勢の変化の影響を受け難いことに対して、政治的ナショナリズムはその影響を受け易く、また運動の目的を達成もしくは失敗することによって運動の持続性を失う傾向を持つ。拙稿、203-204ページ。文化的ナショナリズムと政治的ナショナリズムに関する研究は、John Hutchinson, (*The Dynamics of Cultural Nationalism; The Gaelic Revival and the Creation of the Irish Nation State*, Unwin Hyman, London, 1987), (*Modern Nationalism*, Fontana Press, London, 1994). John Hutchinson and Anthony D. Smith, *Nationalism*, Oxford University Press, Oxford, 1994. がある。
- 56) 李泰鎮は、独立協会の活動について、「半官半民の政府支援団体として出発した独立協会の内部では、日本の侵略主義の魔手が伸びてきて民権伸張の美名で君主権の新しい出発を妨害していたのである」と評価している。ここで、独立協会の活動が権力に反したとは言え、それが日本の侵略主義に結び付くものであったと評価している点について、十分な説明がなされていない。本稿では、漢城新報と独立新聞の関係からして明治政府は独立協会を警戒していたと捉えているが、李泰鎮の評価からすれば、独立協会が明治政府とどのような関係にあったのかは、改めて検討する必要があると考える。李泰鎮『高宗時代の再照明』テハク社、2000年、77ページ。
- 57) 「独立協会の大臣排斥に関する詳報の件」『駐韓日本公使館記録』、1898年11月8日。「尹致昊が沈舜澤などを糾弾する上疏を奉る」『朝鮮王朝実録』高宗38巻、1898年10月11日、4番目の記事。「朴定陽に議政事務を代理するよう命じる」『朝鮮王朝実録』高宗38巻、1898年10月12日、2番目の記事。
- 58) 「独立協会と多数の会を解散させ、当時六個条項を論じて上疏を奉ることに賛成した大臣を全員解任するよう命じる」『朝鮮王朝実録』高宗38巻、1898年11月4日、1番目の記事。
- 59) 慎鋪廈『新版 独立協会研究（下）』、515-517ページ。

- 60) 「李商在などを特別に釈放するよう命じる」『朝鮮王朝実録』高宗 38 卷、1898 年 11 月 10 日、4 番目の記事。
- 61) 「百姓の希望により独立協会を再度設置する」『朝鮮王朝実録』高宗 38 卷、1898 年 11 月 22 日、5 番目の記事。「仁化門外に出て各国の公使と領事に召見した」『朝鮮王朝実録』高宗 38 卷、1898 年 11 月 26 日、1 番目の記事。
- 62) 文一熊（ムン・イルウン）によると、当時日本への亡命者は大きく三つの勢力に分かれており、朴泳孝が勢力統合を計っていたことを明確にした。文一熊「大韓帝国成立期における在日本亡命者集団の活動（1895-1900）」（『歴史と現実』第 81 号、2011 年）、302-316 ページ。
- 63) イ・ファンジク、前掲書、132-136 ページ。朱鎮五、前掲書、178-200 ページ。
- 64) イ・ファンジク、前掲書、139 ページ。愼鏞廈『新版 独立協会研究（上）』、388 ページ。文一熊、前掲書、325 ページ。
- 65) 高珽休「開化期李承晩の思想形成と活動（1875-1904）」（『歴史学報』第 109 集、1986 年）、40-43 ページ。
- 66) 愼鏞廈『新版 独立協会研究（下）』、590-591 ページ。「雑報」『独立新聞』、1898 年 12 月 1 日。
- 67) 義政府は、総理大臣に当たる義政大臣とその代理の参政大臣、そして内部、外部、度支部、法部、学部、軍部、農商工部の七つの機関に構成されていた。「内閣を再び義政府と改称することとした」『朝鮮王朝実録』高宗 34 卷 1896 年閏 9 月 24 日、1 番目の記事。
- 68) 愼鏞廈『新版 独立協会研究（下）』、614-619 ページ。
- 69) 尹始炳、李承晩、崔廷徳を含む少なくとも 11 人がいたと考えられる。独立協会および万民共同会系列の議員が 17 人であったことからすれば、朴泳孝の政界復帰に賛成する議員が多く占めていたことがわかる。高珽休、前掲書、41 ページ。愼鏞廈『新版 独立協会研究（下）』、636-637 ページ。
- 70) 「別報」『皇城新聞』、1898 年 12 月 22 日。イ・ファンジク『独立協会、討論共和国を夢見る』、152 ページ。「朴泳孝召還ノ建議ニ關スル件」『駐韓日本公使館記録』、1898 年 12 月 27 日。
- 71) 愼鏞廈『新版 独立協会研究（下）』、619-648 ページ。「中樞院の議員崔廷徳と尹始炳を解任する」『朝鮮王朝実録』高宗 38 卷 1898 年 12 月 23 日、1 番目の記事。

(2012 年 9 月 7 日レフェリーの審査を経て、掲載決定)

